

「読解リテラシー」のプロセスを意識した単元展開の工夫

～単元「六年生にメッセージを送ろう」における『走れメロス』の活用を通して～

茨城県 つくば市立高山中学校 教諭 前嶋 洋子

1 はじめに

本校学区は古くからの農村が数多く存在しているが、つくば市中心部は大学や多くの研究機関があり、さらにつくばエクスプレス沿線開発に伴って人口が増加し、グローバル化が進んでいる。多様な文化や文明との共存を図り、社会の変化に対応しなければならない場面はこれから益々増えるだろう。このような時代、環境の中で生きる本校生徒は、情報を理解して解釈したり、自分の知識や体験と関連付けて考えたりする資質や能力を身に付ける必要がある。

しかし、本校生徒の実態としては、「読むこと」の学習に対して受け身であることが第一に挙げられる。あらすじをつかむ等、簡単な内容把握をすることはできても、登場人物について深く考えたり、筆者の意図を捉えたり、自分の考えや思いを言葉で表現したりすることを苦手とする傾向にある。主体的な読みに向かわせるためには、まず読む目的を明確にし、読んだことを生かして自分の考えを表現したり、実生活で直面する課題において活用したりする学習プロセスを仕組んでいくことが必要であると考えた。

そこで着目したのが、PISAにおける「読解リテラシー」である。「読解リテラシー」は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」と定義されている。目的意識をもって主体的に読むことや、読んだことに対する自分の考えを表現することを重視した読解の力であり、読む行為のプロセスとして「情報へのアクセス・取り出し」「統合・解釈」「熟考・評価」がある。本単元では、このプロセスを意識しながら、単元展開を工夫した。

2 「読解リテラシー」における読む行為のプロセス

「読解リテラシー」は、目的に応じて選んだテキストを読んで情報を取り出し、自らの知識や体験と結び付けて統合・解釈し、自分の考えとしてまとめ、それらを互いに交流することによって熟考・評価するという3段階のプロセスになっている。

(1) 「情報へのアクセス・取り出し」

「テキストに書かれていることを捉えて理解する」と定義されている。文学作品においては、読解に必要な情報を取り出し、ストーリーやプロット、登場人物について自分の言葉で説明したり、表現したりすることができることである。「読解リテラシー」のプロセスの第1段階である。

(2) 「統合・解釈」

「テキストの内容や筆者の意図などを解釈する」と定義されている。文学作品においては、筆者の意図、登場人物の思考や行動などについて推論し、自分の意見として表現することができることである。「読解リテラシー」のプロセスの第2段階である。

(3) 「熟考・評価」

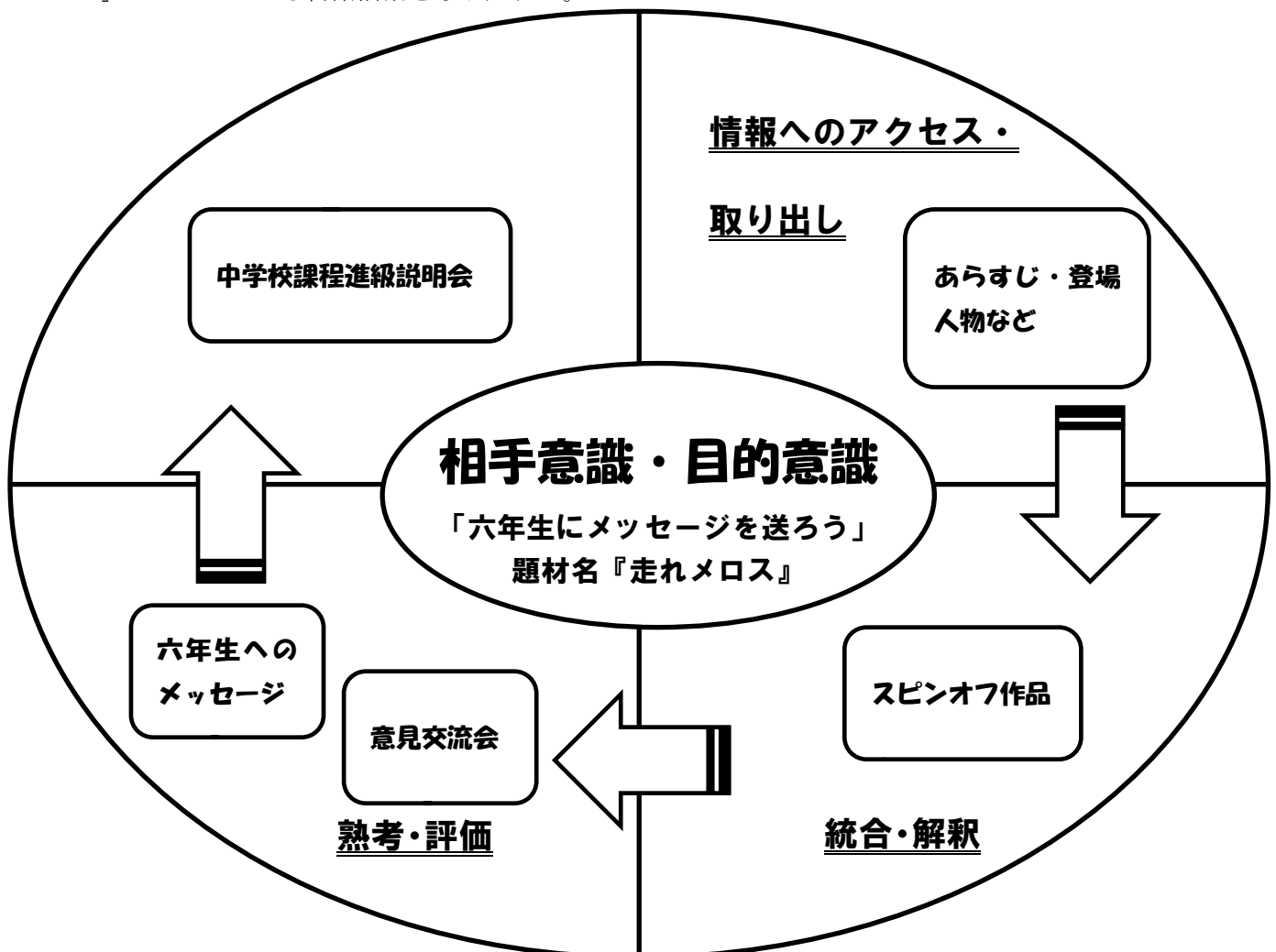
「テキストの内容や表現などを吟味・検討したり、自分の考えをまとめたりする」と定義されている。文学作品においては、自分の考えや体験と結び付け、文章や登場人物を評価・批判し、自分の意見として表現することができることである。また、建設的な話し合いによって学習課題を解決しながら、自分の考えを深めていくことができることも含まれる。「読解リテラシー」のプロセスの第3段階である。

3 単元のねらいと言語活動

本単元のねらいは、「目的意識をもって主体的に読み、読んだことに対する自分の考えを表現したり、自分の知識や体験と関連付けて考えたりすることができる」ことである。

本校では毎年、六年生に向けての中学校課程進級説明会を中学校二年生の生徒が行っている。しかし、例年、校則や行事の説明だけに終わってしまっていたため、生徒から「先輩として、六年生にメッセージを伝えたい。」「でも、どんなメッセージがいいのだろう。」という声が上がっていた。そこで、国語の学習から六年生へのメッセージのヒントを見つけようということになり、いくつかの作品を検討した結果『走れメロス』を活用することにした。『走れメロス』の登場人物は、人を疑ったり、投げやりになったり、自分を正当化したりと人間らしい悩みや苦しみを味わうが、最後は自分の醜さや弱さに打ち勝つ。生徒たちも中学校課程進級以来、様々な困難に直面し、それを解決することで日々成長している。だからこそ、自分の知識や体験と関連付けて考え、「六年生へのメッセージ」という形で表現することができる考えた。

本単元では、「統合・解釈」のプロセスとして、主人公以外の登場人物に焦点を当てて書き換えたり、前日談や後日談を書いたりする（スピンオフ作品を書く）言語活動を取り入れた。スピンオフ作品を書く活動にしたのは、ワークシートによる吹き出しや表など教師から与えられた枠組みではなく、「この人物についてもっと考えたい」「この場面について違う視点で考えたい」という生徒個々の思いを大切にすることが、主体的な読みにつながると考えたからである。また、人物像や心情について深く考え、作品の中に自分の考えを自由に表現することができる考えたからである。「熟考・評価」のプロセスとしては、スピンオフ作品に対する意見交流会で中学校生活や自分の成長を振り返り、自分の考えを体験と関連付けて「六年生へのメッセージ」としてまとめる言語活動を取り入れた。



<単元展開と読解リテラシーとの関連>

4 単元の指導計画

中学校第2学年 単元名「六年生にメッセージを送ろう」 題材名『走れメロス』

(計11時間)

次	時	主な学習活動	「読解リテラシー」との関連 ★文学作品についての力
第一次	1	・学習の流れを知る。	【情報へのアクセス・取り出し】「テキストに書かれていることを捉えて理解する。」 ★あらすじや登場人物について自分の言葉で説明することができる。
	2	・通読し、初発の感想を書く。	
	3	・あらすじや登場人物について友だちと説明し合う。	【統合・解釈】「テキストの内容や筆者の意図などを解釈する。」 ★作者の意図、登場人物の思考や行動などについて推論し、自分の意見として表現することができる。
	4	・スピンオフ作品の書き方を確認し、自分の考えをもとに構想を練る。	
	5	・スピンオフ作品を書く。	
	6	・スピンオフ作品を見直す。	【熟考・評価】「テキストの内容や表現などを吟味・検討したり、自分の考えをまとめたりする。」 ★自分の考えや体験と結び付け、文章や登場人物を評価し、自分の意見として表現することができる。
	7	・スピンオフ作品をもとに意見交流する。 ・自分の中学校生活と比べながら登場人物について評価したり、原作の主題を考えたりして、六年生へのメッセージ作成の見通しをもつ。	
	8	・六年生に伝えたいメッセージを考える。	★話し合いによって学習課題を解決しながら自分の考えを深め、まとめることができる。
第二次	1	・六年生に送りたいメッセージをまとめる。	
	2	・六年生にメッセージを送る。	
	3	・学習を振り返る。	

5 本時の指導

(1) 目標

『走れメロス』スピンオフ作品意見交流会を通して、登場人物や主題について自分の知識や体験と関連付けて考え、六年生へのメッセージ作成への見通しをもつことができる。

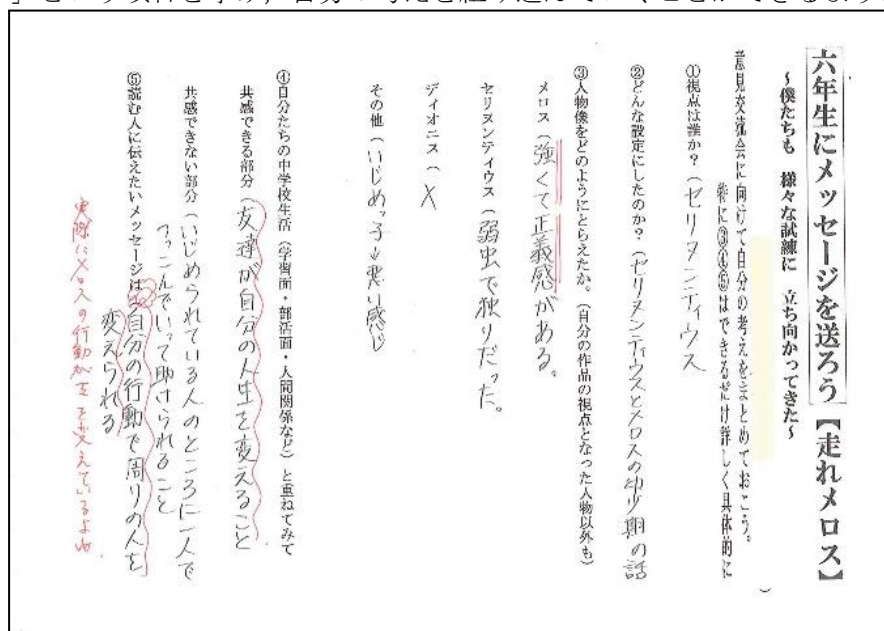
(2) 展開

学習活動	教師の支援
1 学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">意見交流会を通して、六年生へのメッセージ作成のヒントを見つけよう。</div>	・できるだけ同じ登場人物でスピンオフ作品を書いている生徒同士でグループを構成しておき、自分の考えが深まるように配慮する。
2 自分のスピンオフ作品について構想や考えを見直し、意見交流の準備をする。 (1) 人物像をどのように捉えたか。 (2) なぜ、そのような物語展開にしたのか。 (3) 共感できる部分や共感できない部分はどこか。 (4) 読む人に伝えたいメッセージは何か。	・意見交流が円滑に活発に進むよう、 (1)～(4)などについて、再度自分の考えをまとめておくように促す。

<p>3 グループ内意見交流を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スピンオフ作品を読み合う。 ・読んだ感想を述べたり、(1)～(4)の内容などについて質疑応答を行ったりする。 ・『走れメロス』原作の主題について話し合う。 <p>4 グループ間意見交流を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物や主題について、グループ内意見交流での意見をまとめ、他のグループに説明する。 <p>5 自分の考えをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の中学校生活を振り返るとともに、登場人物の考えや行動、作品の主題などから、六年生へのメッセージにつながるものを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・(1)～(4)以外にも知りたいことがあったら質問するように促し、意見交流が活発になるよう支援する。 ・自分の作品の構想や考えと比べながら、原作者の意図を推測するよう助言する。 ・他のグループの意見を聞き、気付いたこと、考え直したいことに着目し、さらに自分の考えを深めることができるよう支援する。 ・スピンオフ作品や意見交流を参考に、六年生に送るメッセージの見通しをもつよう助言する。
--	---

6 指導の実際

本単元において、「統合・解釈」のプロセスとしてスピンオフ作品を書く活動を取り入れたのは、「この人物についてもっと考えたい」「この場面について違う視点で考えたい」という生徒個々の思いが主体的な読みにつながると考えたからである。さらにスピンオフ作品を書く際には、「スピンオフ作品構想シート」を用い、「視点」「場面設定」「人物像設定」「共感できる・できない部分」「読む人に伝えたいメッセージ」などの項目を挙げ、自分の考えをまとめながら構想を練ることができるようにした。例えば「人物像設定」では、登場人物がなぜそのような行動をしたのかという理由や出来事の因果関係など考え、「登場人物をどのように捉えるか」をまとめさせた。理由や因果関係を考えることは、文章を分析・解釈することにつながるからである。「共感できる・できない部分」では、作品と自分を結び付けて解釈することで、登場人物やその行動について納得・共感したり、疑問や批判が生じたりする。また、「読む人に伝えたいメッセージ」は、主題を考えることと連動している。主題とは、作者がその作品を通して読者に伝えようとしていること、願いなどである。本単元は、スピンオフ作品を通して自分の考えをまとめることが目的であるため、「読む人に伝えたいメッセージ」という項目を挙げ、自分の考えを組み込んでいくことができるようにした。



資料①<スピンオフ作品構想シート>

次は、資料①<スピンオフ作品構想シート>をもとに、生徒の書いたスピンオフ作品である。

視点：セリヌンティウス **場面設定**：セリヌンティウスとメロスの幼少期の出会い
人物像設定：セリヌンティウス…弱虫で一人だった メロス…強くて正義感がある
その他…いじめっ子，悪い感じ

幼少期の私は弱虫で内気で友達の一人もいないような少年だった。あの日もいつものように私は周りの子どもたちにバカにされていた。…(中略)…「俺の名前はメロス！悪いことをするやつらは許さない！」それが私セリヌンティウスとメロスとの出会いであった。メロスは一人ぼっちだった私の無二の友になった。彼のおかげで強くなれたし、夢を見つけることもできた。彼がいたから今の自分があるのだ。感謝してもしきれない。私は決めたのだ。助けられたあの日から何があっても彼を信じ続けると。…(中略)…彼，セリヌンティウスはまだ知らない。彼の決意が、彼らの絆が、人々を救いやがてこの国を素晴らしい国に変えることになろうとは…。

「熟考・評価」のプロセスとして取り入れた意見交流会では、上記の作品を書いた生徒は、「読む人に伝えたいメッセージ」として、「友達が自分の人生を変える，自分の行動で周りの人を変えられることを伝えたい。」と発言している。さらに、「暴君と言われたディオニスの最後の変化も，原作の主題になっているのではないか。」と発言している。この生徒の考えに対し，他の生徒からは「私もからかわれて辛かったときがあった。」「苦手な友達にも自分から声をかけてみると状況が変わることってあるよね。」などといった友達関係のトラブルに関する意見が出ていた。このような「統合・解釈」「熟考・評価」のプロセスを経て，この生徒は「いじめのない，みんなが生き生きできる学校にしたい。」という思いをもち，「一人ひとりの行動が，学校を変えていきます。」という言葉でまとめ，自分の思いを六年生に伝えることができた。

その他，意見交流会では，主題を「最後まであきらめないことの大切さ」であると考えた生徒が多かった。そして「何かにチャレンジする時には最後まであきらめないことは大切なこと。特に部活動を続ける上では常に忘れてはいけないことだと伝えたい。」と，部活動での体験と関連付けて六年生へのメッセージを考えた生徒が多かった。また，ディオニスの視点でスピンオフ作品を書いたグループの中には，主題を「人を決めつけて判断しないこと」と捉え，「その人の行動や性格について悪口を言う前に，何かあったのかな，と考えてあげることも大切であると伝えたい。決めつけることは人間関係のトラブルの元になると思う。」と，メロスの行動に対して批判的な意見をもち，それをメッセージにつなげた生徒もいた。



資料②<意見交流会の様子>



資料③<中学校課程進級説明会の様子>

7 終わりに

本単元の実践に関しては「六年生に向けてこんな内容でメッセージを考えましょう。」「この描写から人物の気持ちを考えましょう。」と指導してしまうことは容易である。しかし、それでは、どこか他人事で自分には関係ないという意識があり、深く考えたり、考えを表現したりすることにはつながらないのではないか。何かしら自分に置き換えることで、深く考え、表現することができるのではないだろうか。この実践で、生徒は「六年生の不安や心配を少しでも取り除き、希望をもって中学校課程に進級することができるようなメッセージを送ろう」という意欲をもち、作品の内容を自分のこれまでの中学校生活と関連付けて解釈することができた。さらに、「統合・解釈」のプロセスとしてのスピノフ作品制作、「熟考・評価」のプロセスとしての意見交流会、中学校課程進級説明会における六年生へのメッセージなど、自分の考えを表現する実の場の存在によって、相手意識・目的意識をもって主体的に「読むこと」の学習に取り組むことができた。これは、自分の考えをスピノフ作品に書くことの楽しさ、交流によって見つけた驚き、自分の考えを伝えることや相手の役に立つことの喜びなどを、「読解リテラシー」のプロセスを意識した単元展開の中で生徒自身が実感できたからであると考えられる。

本単元の実践における課題は、成果の振り返りである。生徒の振り返りの文章は「意見交流会でたくさんの方の作品が読めたし、同じ人物についての作品でも考え方が自分と違っている部分があって、なるほどと思いました。」「『走れメロス』から、「友達との絆」「友情の大切さ」などのヒントを見つけて、六年生へのメッセージもみんなと話し合っただけで考えることができました。六年生が真剣に聞いてくれたので良かったです。」などである。自分たちのメッセージが、六年生にどのように、どれだけ伝わったかの記述がほとんどなかった。次の学習への意欲につなげるためにも、六年生にアンケートを実施するなどして、自分たちの学習の成果を分析したり、評価したりする場面を充実させる必要があったと感じている。また、それが、課題を自分自身で見つけ、課題を探求しようとする態度につながっていくのではないかと考える。

(参考文献)

文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版社

文部科学省 (2012) 『言語活動に関する指導事例集』 教育出版

文部科学省 (2015) 『「読解力」向上に関する指導資料』

伊崎一夫 (2008) 『PISA型「読解力」の具体化—工夫改善における三つのポイント』 日本国語教育学会